



日本髪と やはた美容室

新澤米次さん（昭和12年生まれ）はジョイフル三ノ輪が新開地と呼ばれたころから、ここで生まれ育っています

「現金商売だから始めたんです」

昭和初期、米店は、今のように現金商売でなく中晦日、大晦日に1年分のコメ代を集金する商売で、夜逃げや貸し倒れがあり収入が不安定でした。

大正末期にお母さんのキミさんが、米店の傍ら始めた「やはた美容室」は、日本髪を結うお客さんで大晦日は長蛇の列が30m近くまでできていました。お弟子さん達は常時20人程おり、全国各地の地元へ帰ってやはた美容室の屋号ではじめた方も百名程おります。キミさんは、仕事が終わると、浅草のかつら屋さんで修行し、通りすがりの芸者さん達の髪型を観察して自分の技術を磨いていました。

「おばあちゃんの手がとれなかつた」

昭和39年に嫁いで来た弘子さんは「店はやらなくて大丈夫」と言われましたが、住み込みのお弟子さん達が地元で2人3人と帰っていきなくなるのを見て「なんと

かしなきや」と焦る気持ちでキミさんについて美容院の手伝いを始めました。全く初めての状態でしたので、姉弟子から間違っていると、櫛でたたかれたりと厳しい指導を受けながら、できないから仕方ないと頑張りました。

はじめの仕事はふけ取りでした。日本髪を結うと1ヶ月近く髪を洗わないので、まずは頭皮のふけ取りをします。洗髪は塩水で行いました。髪の毛の油落としは、熱くなつたふかしごてを濡れたふきんに一回置き、ジュツとしたところで、おふかしといって髪の毛を1本ずつ伸ばします。

「油をつけるときは男の気性でやらないと」

つげくしで鬢付け油を塗るときは、目が釣りあがるほど髪を思い切り引つ張るので、痛いのですが、そこできゅつと引つ張らなると格好がつかえません。元結（糸）でギュ1と髪を縛ったあと、糸切り歯で糸を切つたので、歯の治療費がかかったそうです。こてを持つての作業は力仕事で手は腱鞘炎になるほどでした。

落ちた毛髪は、かもじ屋さんが取りに来てかもじ（付け毛）を作っていました。

髪を結ったその時より、2、3日経つてから結び直すと綺麗な日本髪になります。日本髪を結うと首のところに高枕をしたり、

うつぶせに寝たりと大変でした。

「お母さんの手はとれなかつた」

弘子さんはお母さんの手の動きを完全に習得するのは難しかったと仰っています。

電パツ、新日本髪、カーボンパーマ、コールドパーマと女性の髪形の流行は変わって行きました。

弘子さんも3人のお子さんを育てながら、家事と育児と仕事に追われて大変だったことと思います。

弘子さんのこうやってと、やっていたいた手の動きの切れの良さ、言葉の端々に芸者さんの持つ粋を感じました。

日本髪を見たのは10年程前に伊豆で芸者さんを1人見たくらいです。今では無くなつていく文化ですね。ひと月も髪を洗わないなんて、びっくりです。おふかし、びん、キワだし、おすべらかしも新鮮な言葉でした。古きよき時代のお話を伺えて笑みがこぼれました。



新澤キミさんが最後に結った
日本髪 40年程前